

「実家」としての住宅計画

一子安浜における木造住宅密集地区の住環境改善—

A housing plan as a "home"
The living environment improvement project of high volume of wooden house area in KOYASUHAMA.

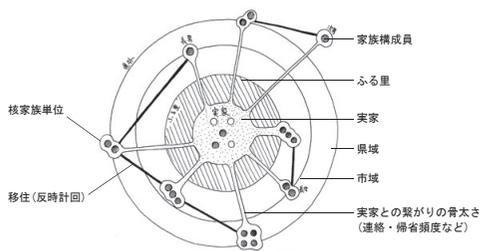
工学研究科 建築学専攻 重村研究室
Shigemura laboratory, Architecture and building Engineering Graduate school of Engineering

201270085 石田 卓朗
Takuro ISHIDA

1. 計画の背景

私たち現代人は住む場所を気軽に変える事が出来る。就職、転職などの機会、新たな家族が増えた時、あるいは単なる気分で様々な地域、住居を流動している。そんな中、人は多くの場合自らの生まれ育った「実家」とつながっている。「実家」の存在はこうした現代的流動者の生活の後ろ盾であると同時に、居住の流動が著しい都市社会のシステムを補っているといえられる。

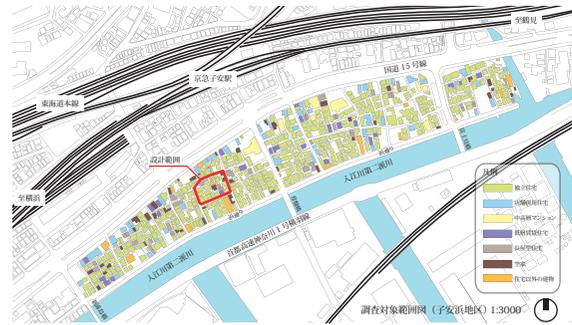
本研究は以上の関心から、住宅計画において未だ検討が不十分であろう「実家」の役割を実証的に考察し「実家としての住宅」という側面から住宅設計計画として具体的な空間像を示すことを目的とする。



とある家族の「実家」と流動的の生活者のつながりの概念図

2. 調査及び計画敷地について

「実家」としての住宅の具体的な考察を行うため、以下の特徴をもつ横浜市神奈川区沿岸部の子安浜地区を対象として調査（住民ヒアリング、実家の図面採取、町並み観察）を行った。また最終的な設計計画の敷地は以下の地図に示す通りである。



所在：神奈川県横浜市神奈川区子安浜地区 用途地域：準工業地域

地域の特徴

- 家業と共に古くから住み継がれてきた住宅群**
当地区は大都市横浜に近接し、大規模都市開発にもまれながらも江戸時代より以前から漁業を継続してきた町である。こうした家業の継承と共に、現在に至るまで地区内の多くの住宅が長く住み継がれてきた家である。
- 路地や井戸の風景**
市内の生活動線はほぼ全てが私道で、土地を共有し合い路地を形成している。路地には漁師が利用していた井戸が点在し、現在では「井戸仲間」と呼ばれる民間組織で維持管理し、生活用水や防災井戸に利用され、町の重要な文化資源といえる。
- 多くの住民共同体**
当地区には井戸仲間をはじめ、稲荷講、地域友好会、西睦会、町内会、漁業組合など住民有志による地域振興団体が多く存在する。
- 木造密集住宅地**
通風や採光、災害時の延焼や倒壊の危険、緊急車両の進入が困難などの問題を抱え、横浜市に改善推進地区の指定を受けている。



昭和中期子安浜の底引き網漁



地先の工業化に対する海上デモ活動



浦島伝説のある当地区の浦島太郎山車



積極的な社会交流のある子安浜



災害時用の井戸。この路地は拡幅道路でもある



浦島太郎が足洗いをしたと伝えられる井戸



住民の募集が募らなかつた巨大集合住宅



首都高速と鉄道、国道に挟まれた子安浜。南に傾斜する丘陵地帯でもある



高密度住宅街の生活動線路地

5.設計(部分設計)

共同はなれ = "cozy hut"

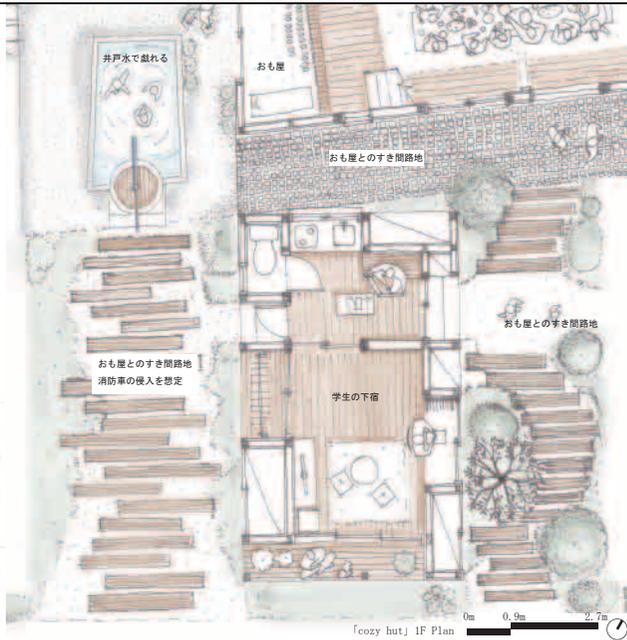
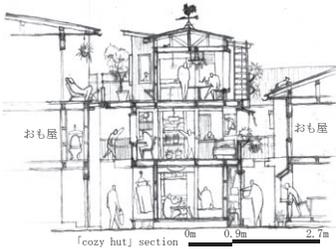
■スケルトンインフィル

空家の柱を柱かし500-1000mm幅のシステムベルトで外壁を構成する。ここに様々なユニットがインフィルされ、路地を彩る壁面が現れる。また外側からの使用も出来る。



■「cozy hut」のルール

- ・3年間で次の3年の所有権を決める(所有権は階数毎)
- ・所有権を持たない家にはデッキを架けない
- ・所有権を持たなくても「実家仲間」に限り、外壁の倉庫や棚は使用可
- ・所有権希望者がいなかった場合は「実家仲間」全員の所有とする(この場合清掃当番を決める事)
- ・第三者(血縁関係者以外)への賃貸は学生および法人に限る



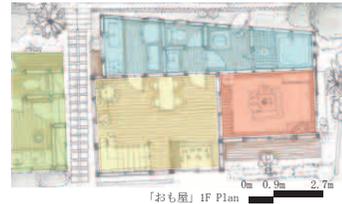
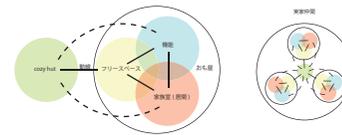
おも屋

「cozy hut (共同はなれ)」が個々の領域を形成するのに対しおも屋では、家族の「集まり」を築く豊かな広がりある内部空間を設計する。

■平面計画

- ①「cozy hut」と隣接する部分にはフリースペースを設ける。(フリースペース:玄関、ダイニング、動線の結節点、居間からの拡張)
- ②フリースペースは居間からの拡張を想定した設計とする。
- ③居間、水回りなどの機能部分から「cozy hut」への独立動線も考慮する。
- ④機能部分以外の内部空間は間仕切りの建具を入れない一室空間とする。

■ダイアグラム



6.設計(街区全体設計)

計画敷地の現状

子安浜の都市型ふる里形成に先立ち、モデルとなる街区を本設計計画とする。計画範囲は井戸及び空き家が比較的中する場所、また鎮守の神社を含む約1.600㎡の街区(現状総戸数23戸)を対象とする。

凡例

- 接道条件を満たさないと思われる建築
- 敷地境界線のセットバックにより改築または移築が求められる建築
- 現状で敷地境界線のセットバックに対応できる建築
- 横浜市が定める二項道(道の中央線から1.25mずつ両側に拡幅する)

■現状写真



更新の方法

子安浜の住民は現在の町に愛情を持ち、なるべく小さな変更で問題解決できることを望んでいる。本提案はそうした住民の意思を尊重した手数のなるべく少ない方法で、モデル街区をつくる。

凡例

- 移築する建築
- 「共同はなれ」となる建築
- 建替える建築(おも屋)
- 取り壊しグライドとする建築
- 道路拡幅によるセットバックライン

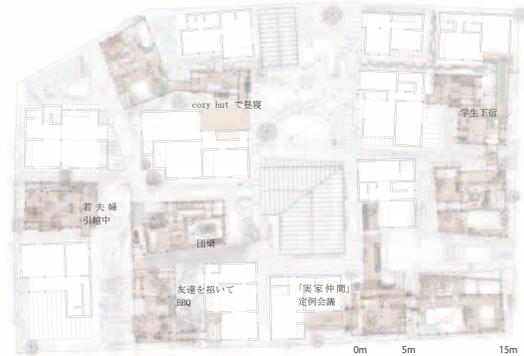
二項道路拡幅の期の基本ルール(下図参照)

- 拡幅道路に接道し、見なし境界線にかかる住宅緊急車両通行幅を確保するため、道路中央線から1.25mセットバックして建てる(移築or建替え)。
- 拡幅道路に接道する住宅立替を行う場合は、cへのはたお提供を推進する。
- 建築基準法上の道に接道しない(接道不良)住宅
 - (a)の住宅の敷地に防災上有効な通路をとることで個別建替ができる。
 - (b)空家隣接する2〜3軒の住宅は「実家仲間」を立ち上げ助成金でこれを買取し建築。共同で再利用する。



7.まとめ

現代では離れて暮らす家族がつながりを保っていられる発達した通信機器やインフラがある。そのため「実家」とは私たちの日常会話の中で実用的に使われる事が多く、単なるノスタルジーによる意味合いばかりではない。そうしたことから、本提案ではフジカルな側面から「実家」を考察する事を心がけたが、住宅が単に実家として機能的なだけでは「実家」とは呼べない。大事なものは「離れて暮らす家族同士をいかに繋ぐか」ということであり、実家としての住宅を計画する上での根源的な理念である。



モデル街区二階平面図



建築アトリエとして機能する「cozy hut」の内観



集会所跡の広場で行われる夏祭り



モデル街区一階平面図



南立面図